100 年の残響　日比谷野音 story 番外編（上）

1969・9・5　全国全共闘連合結成大会
学生運動、衰退の始まり

東京新聞 2024 年 1 月 17 日 配信

昨年、開設 100 年を迎えた日比谷野外音楽堂（野音）の伝説の舞台を再現した「100 年の残響」を連載中、何人かの読者からこんな要望をいただいた。「1969 年 9 月 5 日の『全国全共闘連合結成大会』は学生運動が大きく転換していく過程で象徴的な集会だった。取り上げてほしい」。番外編として 2 回に分けて再現する。

1969 年 9 月 5 日、全共闘連合の結成大会に全国から大勢の学生が集まった

「この隊列には大切な人が入る。しっかりと固めて会場に向かうように」その日、明治大 1 年生の山中健史さんは、そんな指示を受けた。「大切な人」とは東大闘争全学共闘会議（東大全共闘）の山本義隆議長だ。この年の 1 月、安田講堂攻防戦を前に指名手配され、各地で潜伏していた。明大全共闘の隊列に身を預けて野音に入ろうとしたところ、機動隊の検問を受ける。「後に山本さんから聞いたのですが、検問の最後の辺りで面が割れ、逮捕されたそうです」（山中さん）この大会は、日本中で燃え広がった学園紛争の沈静化を図る「大学立法」が前月に公布される中、各大学で組織された全共闘を全国連合として束ねようと開催された。山本さんは、大会で全共闘連合の議長に選ばれることになっていた。副議長は日大全共闘の秋田明大さんだったが、既に獄中にいる。大会を前に 2 人が不在となったことで、全共闘が抱えていた問題点が露呈することになる。全共闘のシンボルとなったのは日大と東大の全共闘運動とされる。日大では 20 億円を超える大学の不正経理問題を質すために結集。東大では医学部での研修医の待遇改善運動をきっかけに大学の在り方を問う闘争に発展した。リーダーも、山本さんは大学院の物理学研究者、秋田さんも一定の政治思想を主張するセクト（党派）とはほぼ無縁の存在だった。

1969 年 1 月 18 日、機動隊に包囲された東大安田講堂

◆リーダー逮捕　セクト主導露呈　ただ、どの大学の全共闘運動もセクトとの連携があったのも事実だ。結成大会も開会早々からセクト色が顕在化する。野音周辺も含めて 2 万 6 千人（主催者発表）の学生が集まった会場は冒頭、山本さんの逮捕が報告されると怒号に包まれた。大半は「不当逮捕」に対する非難だが、そればかりではない。「議長のはずだった山本君の代わりに基調報告を東大の代表が読み上げたんだけど、白いヘルメットをかぶっていたんです。（白ヘルは）中核派

結成大会の会場に入る学生を検問する機動隊員ら

のメンバーですよ。 全共闘を代表するのなら、せめてヘルメットを脱げと思ったし、そんなことを大声で叫んでいました」 日大全共闘に所属していた三橋俊明さんはそう振り返る。 大会はその後、各大学の全共闘からの報告などで進行したが、多くがセクトの指導者による演説だった。 高校生のノンセクト活動家として参加していた山川宏さんは「大会はセクト主導。 はっきりと分かってしまった」と証言する。 実際、大会は新左翼「主要 8 派」のセクトが軸となって仕切られており、採択された大会宣言も、翌 1970 年に自動更新される日米安保条約の粉砕といった政治色の強いものとなった。 演壇では団結を訴えながらも、会場で目立ったのはセクト間の「内ゲバ」だ。 怒号の応酬だけでなく、竹ざおなどでの小競り合いも発生する。 凄惨な内ゲバが世を震撼させた 1970 年代を暗示させたとみる参加者もいる。 三橋さんはこう嘆く。「全国連合の結成大会でありながら、全共闘終焉の場でもあったんです」

＜全学共闘会議（全共闘）＞ 1960 年代後半の学園紛争の際、全国の大学で結成された学生組織。既存の自治会組織や一定の政治思想を主張するセクトを超えた運動体として、一般学生も吸収して構成された。東大では 68 年、大学と対立した学生が安田講堂を占拠し、全共闘を結成。翌 69 年 1 月 18、19 日に大学当局の要請を受けた警視庁機動隊が学生を排除して封鎖を解除した。一連の紛争の影響で同年の入試は中止された。

文・稲熊均 ◆紙面へのご意見、ご要望は「t-hatsu@tokyo-np.co.jp」へメールでお願いします。

100 年の残響 日比谷野音 story 番外編（下）

1969・9・5 全国全共闘連合結成大会 「赤軍派」の登場舞台にも

東京新聞 2024 年 1 月 18 日 配信

大会会場で対立するセクトと衝突する赤軍派の学生たち

連帯のシンボルと期待された東大全共闘の山本義隆議長が開会直前に逮捕される中、これと交差するように大会で脚光を浴びたセクト（党派）がある。 会場では一つの印刷物が売れに売れていた。 赤軍派の機関紙「赤軍」発刊準備号－。 持ち込んだのは、後の日本赤軍最高幹部の重信房子さんだ。 著書「はたちの時代」で、こう振り返っている。「（学生たちが）新聞を奪うように買い求めていきます。 500 部を売り切って、更に 500 部を…」 赤軍派は、この大会の 3 日前に結成されたばかり。 2 万 6 千人（主催者発表）の学生が集まった野音はいわばデビューの舞台で、重信さんも「部隊の登場の場として重視しました」と書いている。 既存のセクトにはない先鋭かつ過激な考えで世界革命戦争論を掲げ、銃や爆弾による武装蜂起を目指す赤軍派は、大会に参加した学生からも関心を持たれた。 ただ、赤軍派はこの大会を実質的に仕切っていた新左翼「主要 8 派」には入っていない。 ブント（共産主義者同盟）から分派した赤軍派には 8 派の一角であるブント主流派から、大会への参加に異議が出され、両派は会場の入り口周辺で衝突する。 慶応大のブント主流派メンバーだった椎野礼仁さんは「迎え撃つ側だったわれわれが劣勢になった。 取り巻いていた学生からも『やめろ』と制止される中、赤軍派が入場を果たしたわ

けです」と証言する。 重信さんも「これ以上ない鮮烈な登場を果たしました。 赤軍派にとって過大な期待と自負を背負うことになりました」と記す。 そんな「自負」も投影したのか、赤軍派の辿った過激化の道は現代史に深く刻まれている通りだ。 この翌年の 1970 年、よど号ハイジャック事件を起こす。 1971 年に連合赤軍を結成。 1972 年、あさま山荘事件により、組織内リンチによる大量の同志殺害も発覚した。 中東に渡ったグループは日本赤軍として多くの国際テロに関わった。 言うまでもなく、野音での大会に参加した学生が、そんなセクトを求めたわけではない。

全国からの学生で埋まった会場

全共闘は各大学で起きた身近な問題への異議申し立てから結成され、多くの一般学生の共感も得てきた。 不当な学費値上げや日大における巨額使途不明金、東大での医学部インターン待遇問題…。 いずれも抗議行動で大学側にも一定の非を認めさせた。 にもかかわらず、最終的には機動隊に排除されている。「各大学の闘争が潰され、全共闘に閉塞感が漂っていた中で、権力に対抗するには二つの道があると考えられたんです。一つは本格的に武装して機動隊に勝つこと。 その可能性を感じさせたのが赤軍派。 もう一つは各大学の横の連携で、全国全共闘連合結成大会はそれを模索するために開かれた。 でも山本さんの逮捕もあって不調に終わり、セクトによる過激化に大きく傾き、全共闘の終わりの始まりになってしまった」。 明治大の学生として会場にいたジャーナリストの二木啓孝さんはこう分析する。 未完のまま終焉を迎えた全共闘運動だが、当時提起した問題には今こそ、議論が求められる課題も多い。 その一つが昨年 12 月に成立した改正国立大学法人法だ。 政府や財界の意向に沿った大学運営が可能となり、大学の自治を崩壊させかねない。 大学の自治は全共闘が訴えた根幹でもある。 日大全共闘に所属していた三橋俊明さんは懸念する。「自治が揺らげば、大学が軍事研究にも利用されかねない。 全共闘が積み残した問題の大きさも感じる」

連合赤軍が立てこもった長野県軽井沢町のあさま山荘
＝1972 年 2 月 23 日撮影

追記 ：この学生運動は我々が大学院修士課程修了の年に始まった． どこの大学でもきっかけは学生寮の待遇改善のように些細な事（当の学生にとっては重大問題であったかも知れないが）であった． それらを巧みに利用して全国組織の学生運動に仕上げた裏には，穿った見方かも知れないが，一部の左翼派政治組織の策略があったように思われる． その所為で各大学は封鎖され，我々は修士論文の発表会を学外の施設を借りて行われることとなり，一部の学生は発表会への参加をボイコットした． その年に東大などは卒業生，修了生を出すことができなかった． このような学生運動は上記のように連合赤軍による「よど号事件」や「あさま山荘事件」へと発展し，その後，急速に学生運動は終息へと向かうこととなる． その過程で政府がどのような手立てを講じたのかは定かでないが，政治に無関心な学生（ノンポリと呼ばれた）が増えてきたことは確かなように思われる． これらの出来事は日比谷野音とは直接関係のないことであった．